

平成二十八年年度
名寄市立大学
推薦入試・社会人選抜

小論文問題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、ティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文を読み、あとの問に答えなさい。

いま流行りのキャリア教育が実施されている現場に行くと、必ず目にするフレーズがある。「夢」「やりたいこと」「なりたい自分」「就きたい職業」……等々である。少々大げさに言えば、今どきの子どもたちは、小学校の時から繰り返し「あなたの夢は？」「やりたいことは？」「就きたい職業は？」と尋ねられながら育っている。現在のキャリア教育において、「やりたいこと」の探求はそれほどまでに重視されている。

でも、そのどこがいけないの？と思われるだろうか。

さすがに僕も、キャリア教育における「やりたいこと」重視を全面的に否定するつもりはない。むしろ、子どもや若者に目標を持たせることの意義は、キャリア教育においてこそ追求されるべきだと考えてもいる。将来の目標があつてこそ、目の前の課題に挑戦し、取り組もうとする意欲も高まるからである。

しかし、同時に、現在のような「やりたいこと」重視の傾向を見ると、どうにも気になってしまふこと、危うさを感じてしまふこともある。このあたりのことについて述べていくことにしたい。

(中略)

表1を見ていただきたい。ベネッセ教育開発センターが実施した「第二回子ども生活実態基本調査(二〇〇九年)から、高校生の「なりたい職業」のランキングを取り出したものである。

質問票には、具体的な職業名をあげた選択肢は用意されていない。回答者(高校生)が自由に記述する形式がとられている。したがって、ここにある分類は、集計の際に調査者がまとめたものである。

さて、ランキングを一瞥すると、すぐに気づくことがある。高校生成があげている職業は、男子の二位の「公務員」を除けば、すべて「専門職(あるいは専門的職種)」である。基本的には、職業生活を通じてずっと同じ仕事をしていくスペシャリス

表1 高校生のなりたい職業ランキング

| | 男子 | | 女子 | |
|----|-------------------------|------|--------------------|------|
| 1位 | 学校の先生 | 4.7% | 保育士、幼稚園の先生 | 5.3% |
| 2位 | 公務員 | 3.6 | 学校の先生 | 5.1 |
| 3位 | 研究者・大学教員 | 2.7 | 看護師 | 4.8 |
| 4位 | 医師 | 2.3 | 薬剤師 | 2.9 |
| 5位 | コンピュータープログラマー、システムエンジニア | 1.7 | 理学療法士、臨床検査技師、歯科衛生士 | 2.4 |

(回答数 6319)

トのイメージである。

調査に回答した高校生のなかには、確かに将来「専門職(専門的職種)」に就くことになる者もいるだろう。しかし、実際には多くは、「事務系の会社員」「サービス系の会社員」「技術系の会社員」になつていくのではないか。(もちろん、これが正社員であるとは限らないという点が、今どきの「時勢なのであるが。)

にもかかわらず、これらがランキングに登場することはない。しかも、「事務系」「サービス系」「技術系」の中身は漠然としており、具体的な仕事内容は、入社してからしか確定しない。そしてその後も、ジョブ・ローテーションによつて変わる可能性も強い。

日本の職業世界では、専門職や専門的職種などを除くと、そもそも雇用は、ジョブ(仕事)によつて切り分けられていない。文系のホワイトカラーなどでは、その枠内であれば、どんな仕事にも対応できることが求められる。職業世界の「現実」がこうであるのに、キャリア教育においては、「やりたいこと(仕事)」を明確にすることが求められる。——こうした対応関係には、もともと無理があるのではないか。

(中略)

「俗流キャリア教育」において、「やりたいこと(仕事)」のポジションは、きわめて高い。しかし、僕が腑に落ちないと思うことのもうひとつは、「やりたいこと(仕事)」なんて、そんな簡単に見つかるものなのか、「自己理解」を深めたからといって明確にできるものなのか、という点についての疑問である。実際、先のベネッセ教育研究開発センターの調査では、高校生であっても、その半数は「やりたい職業」が「ない」と答えている。

子どもや若者には、いまだ働いた経験がない。高校生であれば、アルバイトくらいはしているかもしれない。しかし、アルバイト経験の範囲は、サービス業での接客や販売など、非常に限られたものであろう。昔のように家業を手伝ったり、昼間はフルタイムで働いて、夜間に定時制高校に通つたりするような生徒は、今や圧倒的に少数派である。大学生を見回してみても、事情は変わらない。アルバイト経験に、せいぜい家庭教師や塾講師が加わるくらいのものではないか。

そんな子どもや若者が、「やりたいこと(仕事)」を見つけるとは、いったいどういうことなのだろう。これまでの経験で接したことのある職業人に影響されて、ということもあるだろうが、それも、学校の先生や病院の看護師といった、かなり狭い範囲での「経験」に限られてしまわないか。そうでなければ、メディアを通じて得た「情報」に飛びつくということであろう。

要するに、子どもや若者は、絶対的な意味で、職業(仕事)をよく知らないのである。試みにゼ

ミの学生などに親の仕事について聞いてみても、学生たちの対応はしどろもどろ。会社名は言えたとしても、具体的な仕事内容を言える者はほとんどいない。

それでも、キャリア教育に促されて、「やりたいこと（仕事）」を見つけようとすれば、それは、イメージ先行型の 憧れ あこが に近いものになるか、 出会い頭 あひだ に近い選択になってしまうの难道是なかろうか。

（「キャリア教育のウソ」 児美川孝一郎著 ちくまプリマー新書 二〇一三年 より）

問一 キャリア教育における現在のよ様な「やりたいこと重視の職業選び」について、著者はなぜ危うさを感じるというのか。二百字以内で説明しなさい。

問二 著者が言うキャリア教育における現在のよ様な「やりたいこと重視の職業選び」について、あなたが考えることを六百字以上八百字以内で述べなさい。